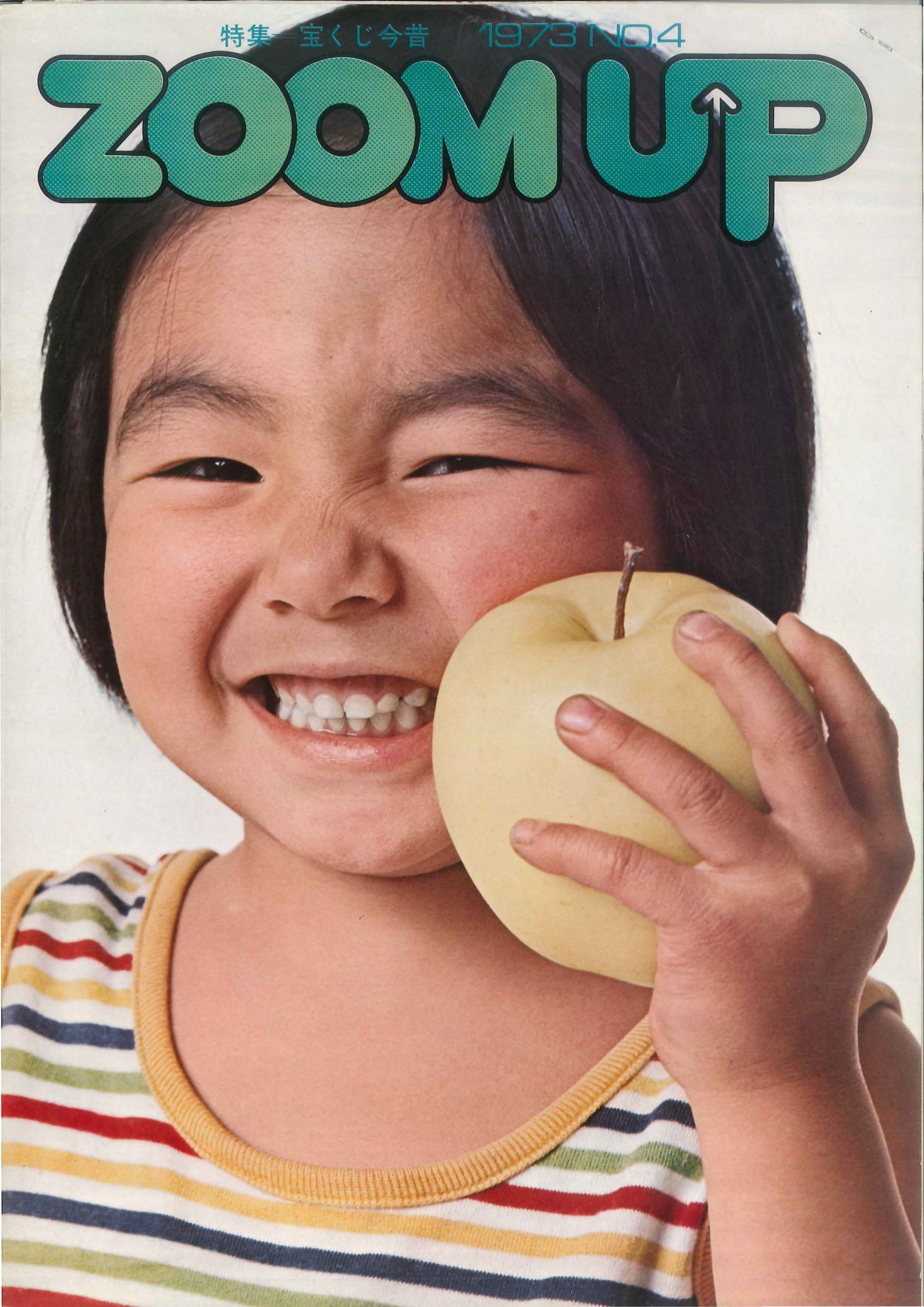
特集＝宝くじ今昔　1973 NO.4

# ZOOM UP



歯界展望

# 鮫島鷹一

日本歯科医師会常務理事

日本歯科医師会で私の担当は学術です。歯科界にとって、学術は非常に広い幅をもっております。学会はもちろん、各種総会、はてはテレビ放送まで含むわけです。

この中で、私がとくに重点的に考えておりますのは、歯科医師1人1人の勉強であり、それを患者さんたちに還元する、ということです。これを医療の根本といえるでしょう。

こうした考えから、歯科医師会は、今年度から画期的な全国研修を始める計画をたてております。これまでも、中央研修会を行なってきましたが、個人的な勉強で終わってしまい、その成果を会員に広く知ってもらう機会が少なかったように思います。そこで、今年度からは、全国の代表を各都道府県から各々2人以上集め講議と実習を柱とした研修を実施し、地域の学術研修の真のリーダーとして歯科医療の充実をはかってもらえるような研修を行ないます。これは今年8月に行う予定であります。

また、この研修と並行して、郡市区単位での新技術講座も開きます。技術習得のため、大ブラウン管のビデオ装置も配置します。

研修のテーマは数多くありますが、第1には医療公害の問題を取りあげます。患者さんとのトラブルを招く医療ミスを防ぐため、歯科医師会も努力するつもりです。

歯科医師も、最近は週休2日が多くなり、1年間に1週間程度の研修ならば、治療に影響なく参加できるでしょう。今年は100人を予定しておりますが、来年は300人の会員に、のべ3ヵ月にわたって研修していただくつもりでおります。

もうひとつ、日本歯科医師会が企画している国民一般向テレビ放送番組である「歯の時間です」を充実させます。この番組（週1回）は、全国31のテレビ局で放送しておりますが、予想以上に視聴率が高く、手紙や電話の反響も大きいのに驚いております。

さいわい、国の歯科医療研修のための予算も、まだ不充分ながら獲得できました。全国の開業医のみなさんが、自由に勉強できる一大研修センターが実現に近づいたものと喜んでおります。

くり返しますが、医師はいかに経験をつんでも、勉強を忘れてはおくれる職業です。日本歯科医師会は、そのための諸設備を充実させ、医師の要望にこたえるべく、努力する決意でおります。

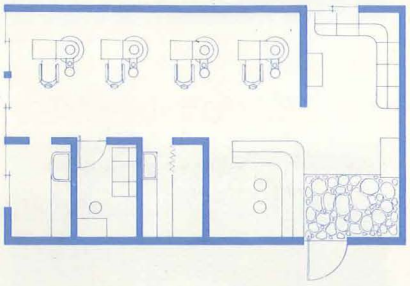
診療室拝見

札幌の草分け

# 窪田歯科

札幌市中央区北三条西２丁目
富山会館内

院　長：窪田賢三先生

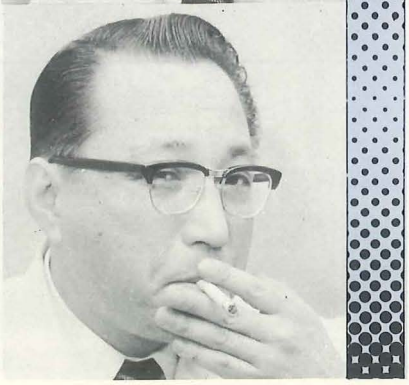


「歯医者の窪田先生」といえば、札幌っ子で知らない人はまずいない。なにせ、先代の窪田為之（ためゆき）先生は、60年も前に札幌で歯科医院を開業した草分け。しかも二代目の賢三院長は、札幌歯科医師会（会員420人）の会長さん。

いわば、百万市民に名のとおった伝統の家柄。さぞかし近代的でデラックスな診療所を、と考えるのが人情だが、ここ国鉄札幌駅に近い富山会館は古き伝統と貫録のある6階建てのビル。窪田歯科は、その二階の一角にある。

小さな看板、控え目な玄関。それでいて、待合室に一歩入ると、順番を待つ患者さんたちでぎっしり。ミセスがいれば、中学生、高校生も詰めかけている。近所のビルのOLも2人、3人とやってくる。

受け付けのカウンターわきに、背たけ170㌢ほどのハチ植えのゴムの木が1本、



大きな緑の葉を広げる。待合室と診療室の間仕切り壁には、造花がずらり。殺風景になりがちな〝病院〟のムードをぐっとやわらげている。

窪田院長は東京医科歯科大学の出身で、ことし48歳。このビルに開業してから8年目になるが、「歯科医師会の仕事をやっている関係上近ごろは忙しくて、忙しくて…。毎日、患者さんと接触出来ないのが心苦しい」という。

およそ70平方㍍の細長い診療室に、治療台が4セット。診療機器は長田電機（本社・東京）が担当している。「設備にはあまり金をかけない主義」というが、患者さん本位の配置があちこちにほどこされている。

フロワーにロンリュームという特注仕立ての敷物を使っているのもその一つ。ソフトな材質で、弾力性があり、入れ歯が落ちてもキズついたり、こわれたりする心配がない。それに、先生をはじめ、衛生士さんらのはき物はすべてゴム底のローヒールで、足音がしない。イライラしがちの患者の精神衛生にも大きなプラスとなる。

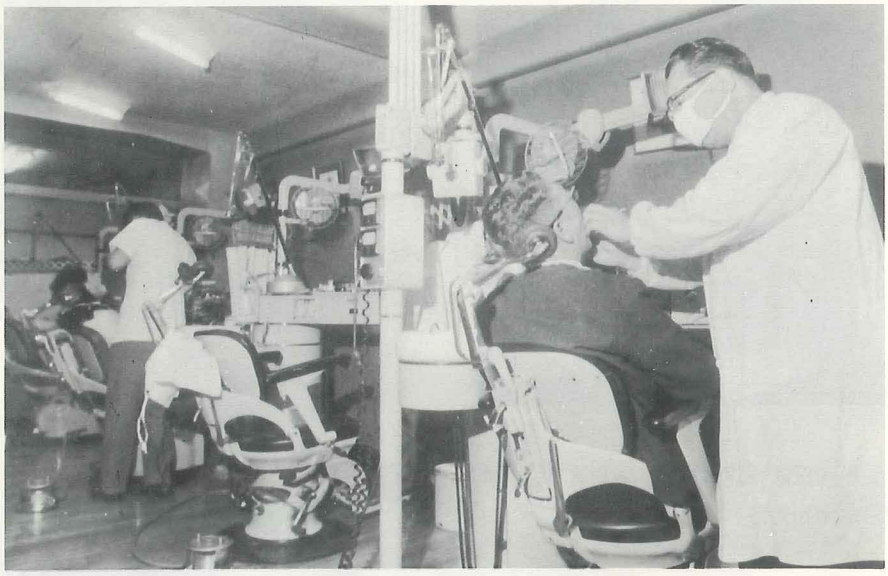
ちょっと気づかないが、天井に取り付けた、けい光灯の位置もきめこまかく計算されている。治療台に向かって、ななめにセットし、医師が患者の口をのぞき込むときでも明りがしゃ断されないよう

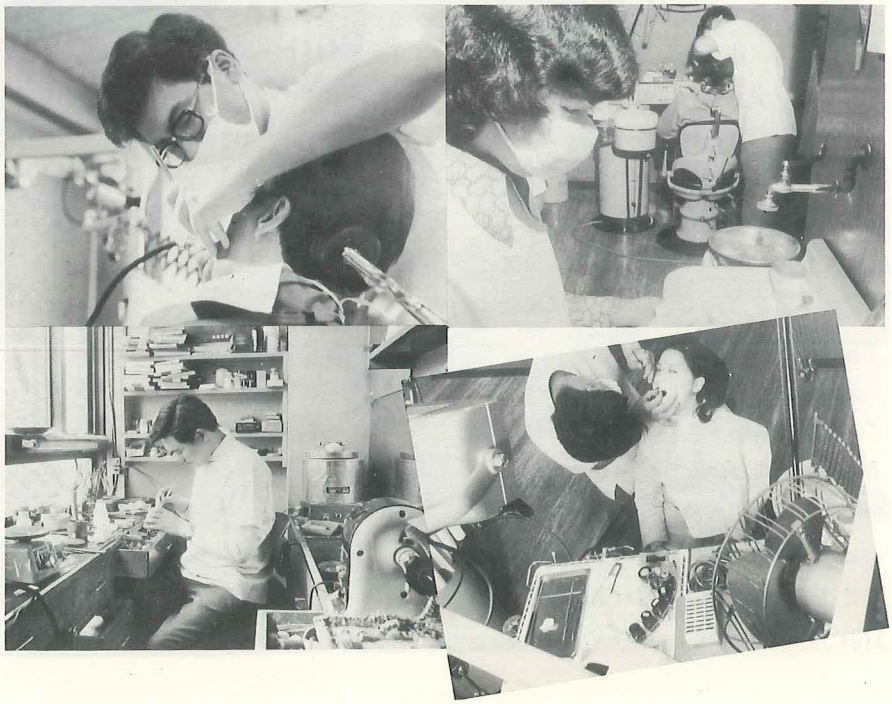
になっている。「ささいなことですが、ちょっとしたことで患者さんとの信頼関係が深まるものです」と窪田さん。

そんな人柄を反映してか、親子3代でかかりつけという患者さんも多く、平日では、朝9時から夕方6時ごろまでびっしり。日に5、60人はくだらないという。やはり虫歯の治療が群を抜いているが、最近は患者の側でも口の手入れが行き届くようになって、高度な治療を求める人が多いそうだ。歯の状態を見れば、民度がわかるという説もあるが、窪田さんは、「札幌は東京並みでしょうね」という。

住宅地の開業医と違って、乳幼児の患者こそ少ないが、次々と詰めかける患者さんに窪田院長と若手の鎌田先生、それに3人の衛生士、技工士1人がかかりっきり。札幌市民のホームドクターだと思えば……」と笑う。

もう一ヵ所、中央区南一条西11丁目の山口ビルにも診療所を開いているが、こちらはやはり歯科医の敏子夫人にまかせっきり。時間があると、いま歯科医師会で建設中の〝歯科診療センター〟の開業準備に奔走している。「たった1人のビル開業医の力では限度があります。時代に即応した診療体制を、医師仲間が力を合わせてつくりあげなくては……」と力説するあたり〝医は仁術〟の心意気がひしひしと伝わってくる。





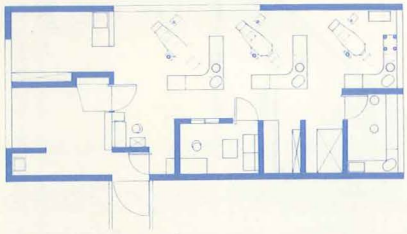
診療室拝見

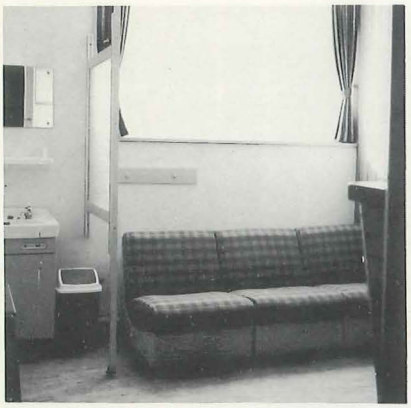
親子二代、対比をみせる診療

# 須田第二歯科

石巻市中央2－1－16　中央ビル

院　長：須田信之先生





石巻市は仙台から国鉄仙石線で1時間半。牡鹿半島のつけ根にある港町だ。仙台からは、松島を越した対岸であり、三陸漁場をひかえ、東北を代表する漁場の中心の1つでもある。

観光客にとっても石巻は交通の要点だ。松島を見たあと、さらに東北の名所をたずねようとすれば、どうしても石巻を通らないわけにはゆかない。海の観光なら、金華山定期航路の発着地である。車の観光でも、国道45号線で「牡鹿コバルト・ライン」を見たあとは、47号に入って鳴子、さらに108で鬼首へ、というコースがいちばん東北のよさを楽しませる。

つまり、石巻は、古い東北のよさを残す土地であり、産業の中心地であると同時に、いちばん新しい東北の一面を持つ土地がらということが出来る。

◇

さて、そういう土地がらの石巻にある「須田第2診療所」だが、石巻市の中心、商店街のビルの2階に、スッキリしたふんいきであった。クリーム色の壁面、木目ばりのドアがモダンに、しかも落ちついたムード。〈オサダ〉のユニットのグリーンが、いかにもこのムードにぴったりおさまった感じ。機械も居心地がよさそうである。

先生は今年32歳。日本歯科を卒業されたあと日本歯科の大学院で研究をつづけ、今年2月までは東北大学の保存教室で講師をしておられたという、学究肌の先生だ。若いに似ず、さすがに落ち着いた方で、あまり口数も多くない（実は、インタビューの相手としては、当方がガサツに出来ているせいか、気おくれがしてやりにくいタイプである）。大学を惜しまれながら退職、2月5日に開業され

診療所には、コンビUB725とハイオート・デラックスのセットが3つ。それぞれ個室のような置き方をしてある。奥さんも先生と同窓の歯科医で、うらやましい形の〝ともかせぎ〟ほかに衛生師さん1名、歯科助手1名、受付事務1名という、みごとな陣容である。理想的といってもいいだろう。

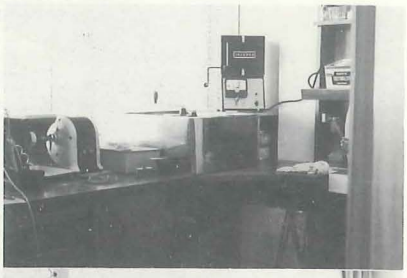
ここの診療所では、計画診療を完全に実行しておいでだ。患者さんは1日せいぜい20人。もちろん予約制である。

「1人の患者さんは最初から最後まで、1人の医師が全責任をもって治療しなければ、完全なことはできない」というのが先生の基本的な考え方だ。

◇

ところで、「第2診療所」という以上、いうまでもなく「第1」というか、「本院」がある。これが、須田信之先生のご尊父、信庸先生なのだ。親子お2人の診療所を対比してみると、なかなか興味深い——といっては失礼だが、実にいい勉強になる。

大先生のほうは、予約制度をとっていない。それで1カ月50～60人からの患者さんを手ぎわよく診療される。朝、まだ暗いうちから玄関先に患者さんが順番を待ってつめかけるそうだ。「東北大の講師をしていたころ、午前5時に家を出ることもありました。そんな時刻にわたしが家を出ると、もう外に患者さんが待って



いらっしゃるんです…」と、若先生はおっしゃる。こんなところに、若先生の計画診療、予約制完全実施の原因があるのかもしれない。土地がら、患者さんの層によって、それぞれ一長一短というべきだろうか。同じ須田先生の2つの診療所が、まるで典型的なテストをしておいでのような気がした。

◇

そんなことを考え考え、　　若先生とポツリ、ポツリとおしゃべりをしていたら、「やァ、遠いところを…」と、大先生が顔を出された。ねぎらいの言葉にあたたかみがあり、大先生はなかなか雄弁であった信濃町で歯科医院を開業されているかたわら慶応大学医学部内科専攻科にかよわれたこと、疎開で石巻においでになったこと、この土地の人がら、歯科医哲学……それからそれへと、話がはずんだ。あとで仙台営業所長に聞くと、信之先生があとを継ぐことになったので、大先生は嬉しさの余り、ここのところ口数が多くおなりだそうだ。いや、いい話でした。

世界の診療室——アメリカ編

# 親しらずの『帝王切開』をして

☆筆者紹介 岩本蘭子
ボストン大学PR学部大学院卒、ルーダー＆フィン、インコーポレーテッド副社長、ニューヨーク在住。

海外生活10数年になる私は、日本で手術をうけた事がないので、日本の開業医の待合室の風景、雰囲気というものをトンと知らない。定期的に全身健康診断を受けたり、歯医者に通ったりしだしたのは、温室的日本の生活を後にして海外生活をはじめてからのこと。それで私の知る医者の待合室の風景、雰囲気は、主としてアメリカのものである。そのアメリカでも珍らしい「待合室の風景」というか、いいかえれば、アメリカなればこそ、といった経験のひとつをお伝えしよう。

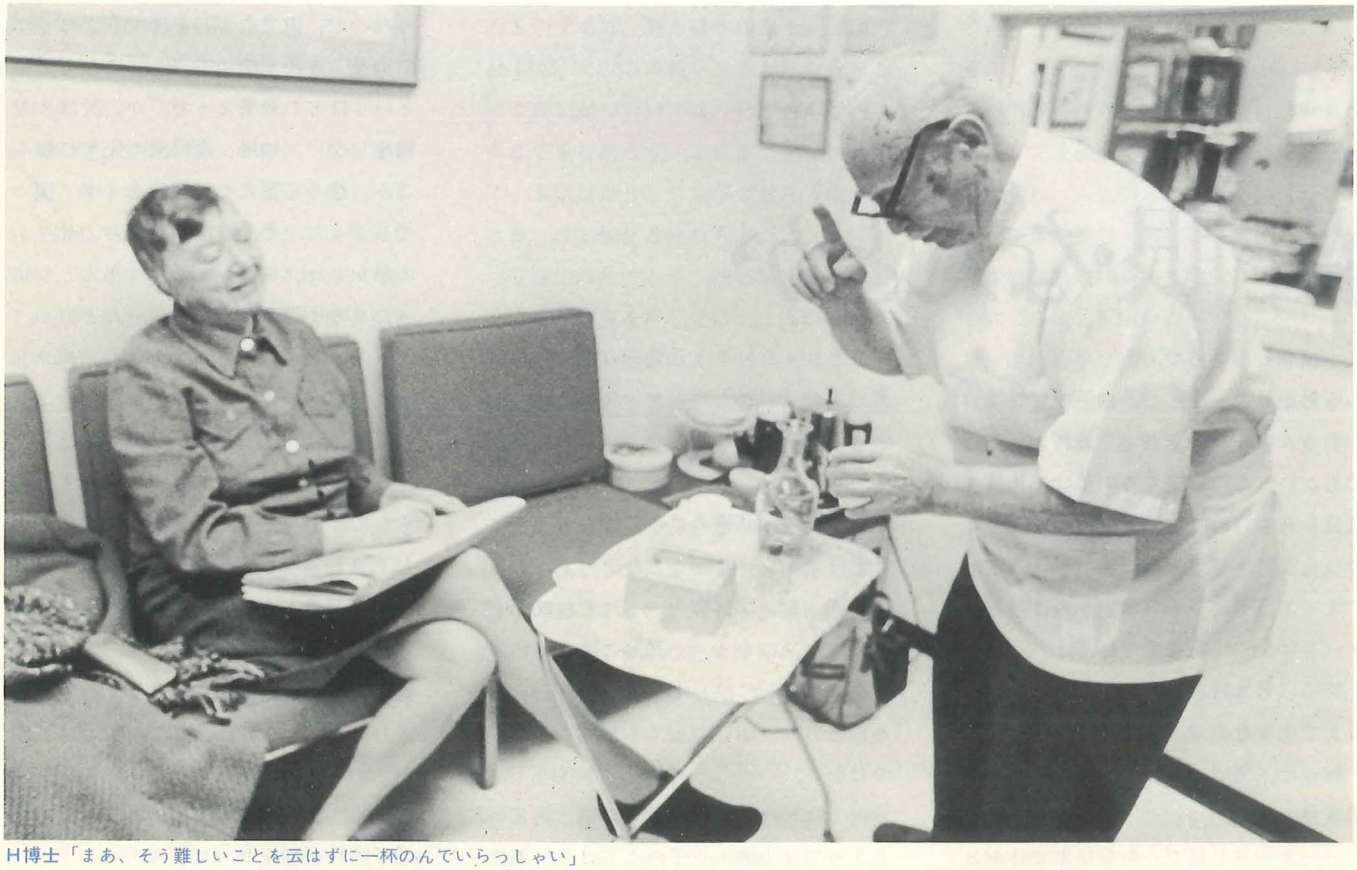
「待合室の風景」というよりは、そういった雰囲気をかもしだす、口頭外科医(オラル・サージェント)のH博士と、彼の30年来の看護婦のGさんといった方が適切かも知れない。

私がこの2人に会ったのは、かれこれ10年前になるので、その当時すでに相当の年配だった二人は、現在では確かに70才前後であろう。H博士の方は、待合室の壁にところ狭しとかけてある色々な学位や賞状類の日附けから判断すると、70才をとうの昔に越しているかも知れない。

それにしても、「若い」こと、人なつこいことで世界に知られたアメリカ人の中ですら、この二人はとびはなれて若々しく、人なつこい人達といえる。私のいう「若さ」とは、肉体的なものよりも、もっと気分的なもので、表現すれば、春のような希望にみちたのどけさであり、子供のような邪気のない好奇心を意味している事をつけ加えておきたい。

何はともあれ、H博士とGさんの2人は、「袖ふれあうも何かの縁」というこの世の中で、たまたま博士の門を叩くこととなった患者は、一人残さず、始めはどんな難しい顔をしてやって来ても、治療を終えて帰る時には必ず笑顔にして帰してみせる、といった風の考えを持っているに違いない。

博士の待合室にはいつも電気コーヒー・ポットにお湯がわいており、インスタント・コーヒーとリプトン紅茶が用意されている。患者は勝手に、自分の好みにそってコーヒーなり紅茶なりを入れて、これまた好みにそってクリームやお砂糖を入れて飲み、食欲のある人は、ポットの脇にそえてあるお菓子の入れ物からクッキーやビスケットをつまむ事も出来る。患者が人見知りするタイプと感じると、Gさんが「ハウ・アバウト・ティー？



H博士「まあ、そう難しいことを云はずに一杯のんでいらっしゃい」

(お茶でも如何)」とうながす。

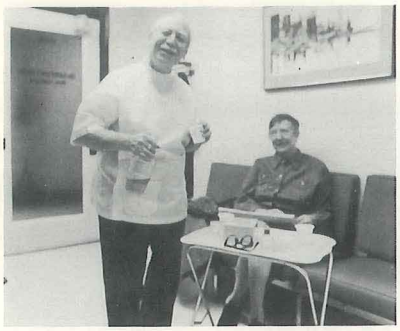
たまたまGさんが休んで、代りに臨時の看護婦がいた時に次のようなエピソードがある。治療にやって来た私は、待合室で雑誌をよみながら私の番が来るのを待っていた。それを見つけた博士は、すぐさま看護婦に「ミス・ラン子にお茶を入れてあげなさい」と指図した。私は別に欲しいと思わなかったので自分でお茶を入れなかっただけなのだが、この看護婦が忙しさにかまけて「オオ、彼女はそれ位の事自分でも出来ますよ」と云ったら、その言葉が消えぬ中に博士がサッと待合室に入って来て、「それでは私がお茶を入れてあげましょう」というのには驚いた。

待合室に常時おいてあるのはコーヒーと紅茶とクッキーだけだが、患者の為に待合室に出て来るものはこれだけではない。治療、特に何かの口頭手術をすませた患者は「一杯飲んでいきますか？」と聞かれる。「イエス」ともなればすぐさま小型テーブルが持ち出され、その上にウイスキーの瓶とグラスがのせられて、博士はもとより、他の患者も仲間入りして、ちょっとしたパーティとなり、世間話に花が咲くこととなる。

そういうわけで、患者の中には博士と30年、40年来の知己になってしまった人も多いようだ。こういう私も、何かの縁で、もう10年来の知己になっている——とはいっても、殆んど博士とGさんのことを思い出すこともなく過ぎた10年ではあったが。

それが、この春に、突然旧知を温めることとなった。事のきっかけは、ここ2、3年、ちょっと顔を出したりひっこんだりを繰り返していた左下の親知らずが、何のはずみからか、猛烈な勢いで生えだしたことにはじまる。

「猛烈な勢い」と思ったのは、相当な痛みがともなったからで、呑気者の私は



「さあ、乾杯ですよ」
● 左から、H夫人、看護婦のGさん、そしてH博士
● H夫人の脚に御注意、始め固くなっていたのが、だんだんとリラックスする様子がアリアリと写真い出ています

「一杯飲めばもう大丈夫」

「ミス・ラン子、貴女も乾杯の仲間に入りませんか？」

この痛みはてっきり親知らずが、歯グキを押し上げて破って生えて来るため、と思いこんでいた。

時は2月の終り。3週間後にひかえたヨーロッパ経由での日本旅行を前に、私は旅行の準備やら仕事の整理やらで忙殺されていた。正直のところ、親知らずどころの騒ぎではなかった。しかしあまり痛むので、近所のドラグ・ストアで1$程度のアンペソルなる、口頭用応急痛止めの液体ぬり薬を買って来て、局部にぬり、まるで泣く子をあやす調子で親知らずをなだめながら仕事を続けた。

そのうち何だか熱が出て来て、痛みはひどくなるばかり。2瓶めのアンペソルがそろそろカラになる頃、たまたま親しいアメリカ人の友人が電話して来たので、何げなくこの話をしたら、さあ、医者にいけといって聞かない。私は「冗談でしょう、そんな時間があるもんですか」といったが、結局は友人の懸念と歯のうづきに負けてかかりつけの歯医者の門をくぐった。

レントゲンをとった結果、何と、左下の親知らずが、真横になって、前方の奥歯に突進して生えて来ているので、至急抜かねばならん、と診断された。旅行を前に、昼も夜もないようなスケジュールに追われていた私は、かくて、それこそ身を切られる思いで、この突発事件と対決することとなった。

たかが歯1本、と思ったが、この段階でほんのささいな手違いでもあってはと、私は歯医者が指名した外科医は断って、親身になってくれること疑いなしのH博士に頼む事にした。云い忘れたが、H博士はアメリカの歯科関係の大学の教科書にのる程著名な口頭外科医であるから、いささか老眼のハンディはあるとしても、専門技術は確かな筈であった。

そういうわけで、3月の初め、博士とGさんに両脇をはさまれて、私は治療室

の椅子にたいした懸念もなく腰を下した。局部麻酔を何本かうって、それが利いてくる迄の間、博士は「あまり容易な手術ぢゃないですよ。帝王切開ですからね」と冗談めかして私の気持の準備をした。一方Gさんは、「心配ないですよ。貴女のはそれ程複雑じゃありませんからね。人によると、顎の骨まで達する手術をするのですよ。」といって私を慰めてくれた。

さて、いよいよ手術にかかったら、私のアメリカ人の友人が「親知らずなんて15分もかからない」といったからではないが、たいした事もあるまいとタカをくくっていた私の予想と反して、エンエンと一時間はかかる、ちょっとした手術となった。博士にとっても予想した以上の困難なケースであったらしい事は、手術中に彼が何度も「ウーン」とうなったり、「小さな女性にしては大きな歯だね！」と憎れ口をきくので解った。

ジージーと、例の私の大嫌いな電気アーム(？)で繰返しけずられたり、カナヅチでカンカンさし込れたテコらしいものの頭をたたいて歯を割ったりする過程を耐えている中に、私は油汗でビッショリになった。そしてそれでもまだ歯がとれないで、博士が「ウーン」とうなったり、Gさんが「オウ、オウ」と同情して私の額の汗をふいてくれたりすると、心からゲッソリして、中途半ぱな退化状態の親知らずが恨めしくなった。

やっとの思いの手術がすんで、ついて来てくれた人のいる待合室に戻った私は、心身のうけたショックで蒼ざめ、躰のふるえが止まらぬ気がした。博士もそういった私の様子を充知してか、「一杯飲んでいきますか？」とは聞かず、「一杯お飲みなさい」という。

そして正直のところ、私も、なるほど、それはもっともなアイデアだ、とその瞬間心の底から感心したものである。それでどうせの事なら「御手持の中で1番強いのを下さい」と申し出て、私の大和魂がまだまだ健全であるところを披露し、それで博士とGさんと私の友人と私の4人でのブルボンの乾杯となった。博士とGさんは、勿論、形だけの乾杯だったが、私はストレートで続けてのんだブルボンが、この時ほど、水のように何の手ごたえもなく感じた事はない。

手術は金曜であったから、別れる時に博士は手当の注意をしたあげく、週末に何かあったら遠慮なく電話しなさいと、自宅の電話番号を教えてくれた。

帰宅するや、私はもらったお薬をのんで、氷ノウで左頬を押えて寝てしまったが、夜になってふるえが来、激痛に悩まされて心細い思いをした。翌日、熱が出て来たようなのではかったら、9度近くある。心配して電話して来たアメリカ人の友人に熱の事を云ったら、日本の体温計ではかった熱なので話が通じない。考えてみれば、アメリカの体温計を買う必要に迫られる事もなかった程、私はずっと健康で、また、無頓着な人間でもあったわけだ。

ともかく翌日、人間の顔でもこんなに腫れるのかと思う程、私の顔の左側が腫れ上ったのには驚いた。鏡の中の自分の顔にあきれたり、みとれたりであった。痛みは相変らずであったが、それでもこういう時でなければ読みたい本がよめないと、書棚から「恍惚の人」をひっぱりだして読んだ次第である。今から考えると、さぞかし奇妙な風景であったろうとおかしくなる。

友人が熱の事をしきりに心配するので、H博士の自宅に電話したら、メッセージ係が博士は不在ですという。電話をくれるよう、メッセージを残して、博士からの連絡を心待ちに待ったが、土曜はおろか、日曜日の夜になっても音沙汰がない。あんなに親身なことを云ってくれても、それは口先だけで、しょせん博士も他の

「さあ、それでは、ミス・ラン子の帝王切開成功を祝して……」
●H夫人の脚が表情たっぷり

「バンザイ」
●私の左頬はまだいささか腫れています
●H夫人の脚が乾杯(トースト)の効果を物語っています

H博士「さあ、それではお友達として貴女の口の中をのぞいてみましょう」
H夫人「はい」

看護婦のGさん「心配しなくても大丈夫ですよ」

「アーン」

エコノミック・アニマルと異らないのか——と、氷ノウを頬に、佗しい想いにかられ出したところに博士から電話があった。

「バルティモアに行っていて、本当ならこの木曜迄ニューヨークに帰って来ない予定だったが——実は兄が急に亡くなってね。でも、貴女や他の患者の事が心配だったので戻って来たら、やっぱり貴女から電話があったという。具合はどうですか？」という。私はこの時程、たとえ一時とはいえ、人の言葉を疑って済まなかった、と思った事はないし、また、ああ、矢っ張り私の人を見る目に狂いはなかった、と嬉しかったこともない。

それで翌日治療に訪れた時、博士には日本酒を、Gさんには梅酒を1本づつ「日本酒です。あなたの気分をひきたてる為にどうぞ（ジャパニーズ・スピリット・ツウ・チェア・アップ・ヨア・スピリット）」とプレゼントした。「ジャパニーズ・スピリット」とは、我ながらいい事を云ったと思う。アルコール飲料のことを俗語でスピリットというが、普通は精神のことを指すから、いい具合に両方に当てはめたことになる。

こうして博士とGさんの、親身の心遣いのお蔭で、私はめきめき回復し、1週間後には糸をぬく事になった。その段階になって初めて私は「一体、幾針ぬったのですか？」と尋ねる事を思いつき、「7針」と聞いてまたビックリした次第。

それからも、2週間後に私が旅行に出発するまで、1日おきに治療に通ったが、ちょうどその頃私の友人で、作家のヘイガー夫人がかかりつけの歯医者が急病になったので、1ヶ月は治療を中断せねばならぬハメになった事を耳にした。理由は、彼女の歯医者はまだ30代だそうで、休暇で南国の海にいって大好きなスキン・ダイビングをしたのはいいが、あまり熱中しすぎて躰の具合が悪くなって、彼の医者から静養を申しつかったのだとのこと。

私「此処に来て良かったでしょう？」
H夫人「ほんとに貴女にはかないません」

「これで又、お友達が出来ました」

「若い医者は視力も手もしっかりして、近代的技術を身につけているかと思うと、今度は冒険心がすぎたり、健康にまかせて無茶をして病気になってしまうから困ったものです」と夫人は苦笑する。

それでは——と、私は彼女にH博士とGさんが如何に素晴しいかということを次々と披露し、「何かの時の為に」と、躊躇する夫人を説き伏せてとうとう博士のところに同伴した。そして「ほら、新しい患者になるであろう人を連れて来ましたよ」と紹介した。生真面（キマジメ）なところのある夫人はビックリして「私は医者を変える気は毛頭もないのです」と逃げ腰になった。博士とGさんは吹き出して「まあ、そういわずにミス・イワモトの帝王切開成功と、ボン・ヴォヤージュを祝って、乾杯しましょう」という事になった。

「スピリット」の嫌いではないヘイガー夫人は、それでも、始めのうちはこうしてたぶらかされて、歯の1本も抜かれるのではないかと懸念していたらしいが、2杯目の「乾杯」が空になる頃にはすっかり博士の待合室の雰囲気になじんでしまった。それでころあいを見はからって、「あなたの治療中断しているところを、博士にお友達として、のぞいてみて貰っては如何です」と声をかけたら、驚いたことに、大変気軽にオーケーと、治療椅子に坐って「アーン」と口を開けた次第。

このように、H博士とG看護婦さんは、どんな生真面な、または神経質な初対面の人でも、あっという間にリラックスさせてしまう素晴しい人柄とテクニックを身につけたチームなのである。

## アシスタント紹介
### 小嶋歯科クリニックのみなさん

東京都港区浜松町2－4－1
世界貿易センタービル14階
院　長：小嶋栄一郎先生

今回は趣きを変えて、女性陣に集団でご登場いただいた。いずれがアヤメかカキツバタという具合いで代表一人を選ぶのがむずかしかったこともあるが、医院経営上最も大事なチームワークのよさを大いに参考にしていただこうというねらいでもある。

一人がお休みということで、顔をそろえてくれたのは院長のほかに女性ばかり7人。薄いグリーンのユニフォーム姿にずらり居並ばれるとなんともまぶしい。目を落とすとこれもおそろいのまっ白いくつ。いい感じである。

――どうして歯科医院で働こうと思ったの？「資格を持っていれば、どこででもやっていけると思って…」と残り半分は口の中で答えてくれたのが、この4月に入ったばかりの瀬戸さん。「長続きできる仕事だと思って…」と増田さん。婦長の赤穴さんは「私の場合は偶然のことで…」。「女性しかなれない職場でしょ」と二瓶さん。ごもっとも。

――じゃ、実際勤めてみた感想は？「うちのことではなく一般的にいえば、医療機関の待遇はほかの職場より悪いのじゃないでしょうか」―貫録十分、婦長の口調に、このとき組合の闘士を思わせる響きが…。小嶋歯科クリニックは夜6時には家路につくことができるのだが、開業医の中には遅くまでやっているところもあるので大変。ほかの一同、実態報告に聞き入る面持ち。

しかし、「患者さんからありがとうといわれるのは生き甲斐です」と大島さん。

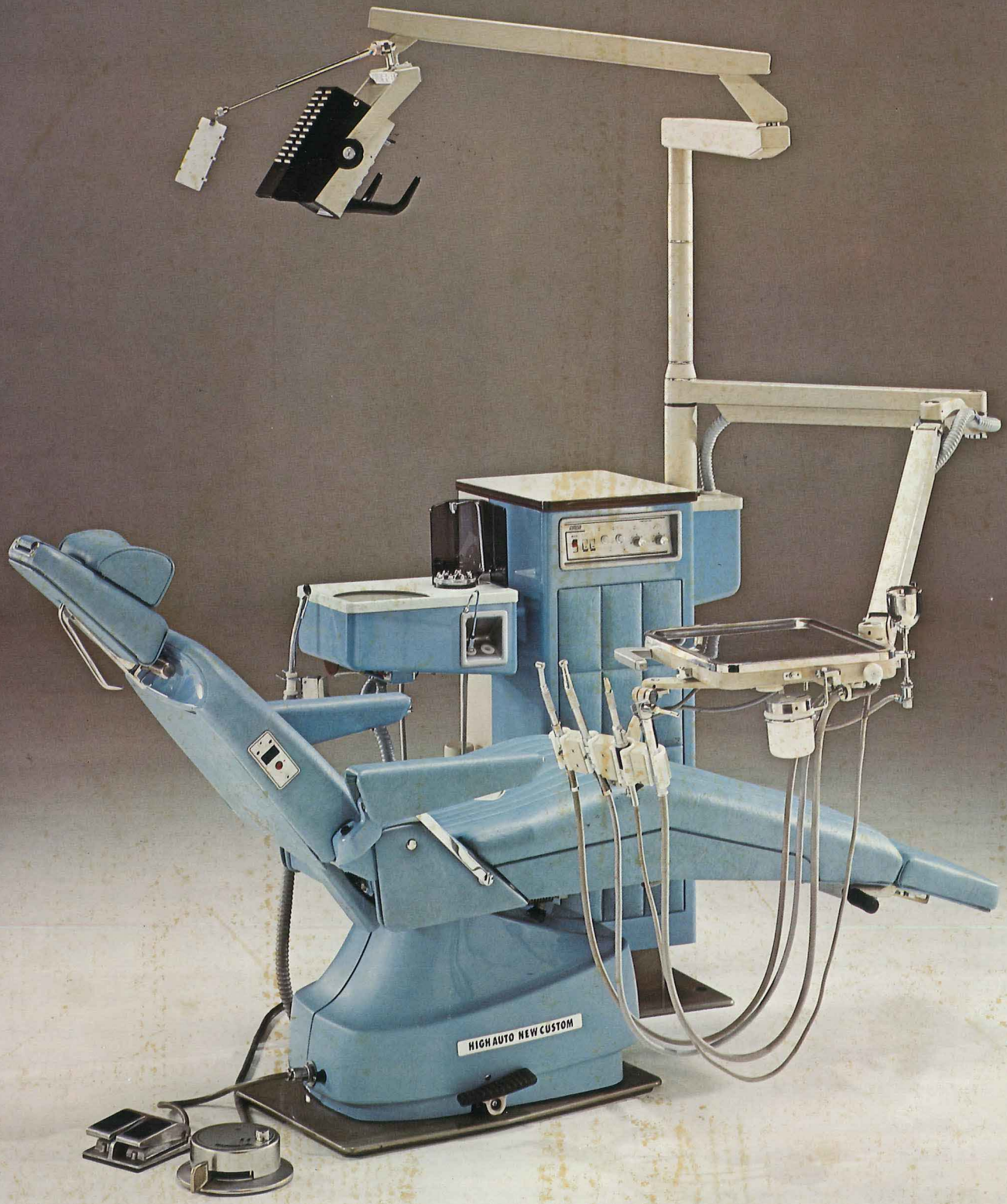
――楽しみは？「毎月一回先生以下全員でどこかへ飲みに行くとき」古川さんのことばにどっと笑い声。そうでしょう。費用は院長先生持ちなんだから。そのほか秋には1泊2日の旅行も、ここでは定期的なレクリエーション。

――いやなことは？「人間関係がうまくいかないとき。いまはうまくいってるけど」「女性ばかりの職場にはいろいろ問題が多いわね」―この質問はみなさんたちの関心の核心をついたようだ。ポンポン発言が出る。「先生がうまく行かないと私たちに当たることも」「患者と先生の間、技工士と先生の間という風にいつも私たちってクッションの役割りをするので、それがむずかしい」―率直なところが気に入った。人間関係がスムーズに運んでいるのはこんなところに理由がありそう。秘書の林さんはそのへんをこう説明してくれた。「年齢的に格差があること、それぞれ大人であること、気づいたことは注意し合うことがうまくいっている理由じゃないかしら」それともうひとつ37歳の小嶋院長の人柄。人物評はこんな調子。「短気でないのがとてもいい」「友だちみたいにつき合える」「精神的な若さ」「こまかいことによく気がつく」

ここの医院は、衛生士もイスに腰をかけて仕事をする。完全なアポイントメント・システムだから一人の患者を集中的に治療する。しぜん時間がかかるので衛生士も疲れないようにとの配慮である。お互いの心づかいが職場を明るくするという印象が強く残った。

〔小嶋院長からひとこと〕

患者との応対や電話のかけ方なども外の講習会で勉強させています。有資格者も、そうでない人も、それぞれに分担をしっかりと守り、互いに仲間を認め合っているのもチームワークがいい原因だと思いますよ。

先生の治療しやすい、お好きな高さ・角度・位置が選べます。〈オサダ〉も、“技術のオサダ”の名にかけていち早くこのテーマの研究・開発に着手し、すばらしい成果をおさめました。ここに紹介するコンビシリーズ、自由にその高さ・角度・位置を選びながら治療できます。

# DENTAL UNIT COMBI